

Group 2 Plan 3



「おじゃまします」

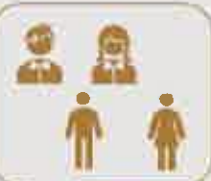
交流しながら見守りあう新たなコミュニティ拠点-

01. 誰が住む？

高齢夫婦世帯



住居の余剰部屋を同じ集合住宅の住民との
コミュニティ拠点に改修する



01-1. 社会・入居者らの背景

- ・ 高齢者：地域のなかでの役割の総室
- ・ 世代間交流の減少
- ・ 子どもの安全な放課後の遊び場減少

01-2. 不動産・オーナー側の背景

- ・ ライフスタイルの変化により、以前に建てられた住居の間取りが好まれにくい→入居率の低下
- ・ 孤独死の発見遅延

02. 住まいの工夫

02-1. 集合住宅で「見守りあう」ための計画

- ・ 高齢夫婦2人が快適かつコンパクトに生活でき、+αとして団地の人々が集う土間空間がついた計画。
：余剰部屋をコミュニティ拠点として活用でき、建物全体の資産価値を底上げできる。
- ・ 集合住宅のコミュニティ形成空間として活用することで、夫婦が子どもを見守ることができたり、逆に高齢者の孤立防止のため周りが夫婦を見守ったりといった「見守りあう」関係性を構築できる。
- ・ 高齢夫婦の生活空間を開放してしまうとプライバシーや安全面での負担が大きくなるため、新たに設けた土間空間をを共有スペースとして小規模で活用する。
- ・ よく人を招くことを想定し、生活空間と外部の動線が被らないゾーニング計画を意識する。

02-2. 土間スペース活用プラン

- ・ 面識のある集合住宅の住民同士の交流を目的とした場として位置づける。
- ・ 利用目的は、居住者と訪問者が談笑するなどして一緒に過ごすことを基本とする。
- ・ 子どもの利用時は、談笑に加えて読書や宿題、お絵描きなどにも使えるようにし、交流をしながら、または同じ空間でそれぞれが自由に過ごせる場として活用できる。
- ・ 同じ集合住宅の住民のみが利用できる登録制とすることで、安全性を確保する。
- ・ 利用時間については、週1回・1～2時間程度を目安としつつ、高齢夫婦の都合や他の住民の参加状況に応じて開放するタイミングを臨機応変に決める仕組みとすることで、居住者がストレスなくスペースを活用できる。
- ・ コンパクトで住みやすい住宅計画となっているため、客間以外での土間活用(趣味部屋にする等)も可能。

02-3. 既存住宅からの改修点

- ・ 押し入れをトイレに改修し、ホールと接続する方向にドアを配置。
- ・ 壁を新設し、洗面脱衣室を設け、より使いやすく快適な水回りにする。
- ・ 畳をフローリング張り替え、ベッドを置ける寝室にする。
- ・ キッチンの壁を壊し、LDKを1つの空間に設ける。
- ・ 余分な洋室1室を玄関から靴を脱がずに過ごせる土間

03. 空間イメージ

アイソメシ



客間ハース

- LDK -



- 土間スペース -



LDKは1部屋にまとめる。 交流の拠点として活用。

04. 配置計画

